2025年4月27日　第二礼拝

説教題「復活の希望が照らし出すもの」第一コリント15章1～11節

主任牧師　加藤　誠

「最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは…キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと…」（第一コリント15：3）

先週は喜びと賛美あふれるイースター礼拝をご一緒にささげることがゆるされ感謝しています。W・バークレーという聖書学者がこう言っています。「復活の信仰は、イースターの時期だけでなく、クリスチャンがそれにより毎日を生き、それにより最後に死ぬ信仰なのだ」と。復活の希望と喜びがイースターで終わることなく、私たちの日々を生きる力となり、死を前にしたときの力となることを祈りたいのです。

先週のイースターでは、復活は弟子たちが霊的に新しく生まれ変わらされた体験であったことをお話しました。弟子たちの心の目が開かれて、十字架に込められた本当の意味、神の愛が見えてくる。悲しみと絶望にしか見えなかった十字架には、実は神の愛と祈りが込められていること。人間がどんなに罪深い者であっても、神の愛と希望の働きは決してついえていないことが見えてくる。そういう聖霊による霊的な革新の出来事であったことを語らせていただきました。十字架に込められた神の愛、主イエスの祈りが見えてきた時に、頭を抱え、うずくまっていた弟子たちは立ち上がり、顔を上げて、神の国に向かって歩む者に変えられていったのです。聖霊の働きにより神の愛に向けて心の目を開かれた人々によって、教会が誕生していきました。

今朝、ご一緒に読んだのは主イエスの弟子の一人であるパウロがコリントの教会に宛てて書いた手紙の一部です。ここに最初期の教会の人たちが何を信じていたのか。彼らが生かされていた信仰が浮かび上がってきます。「キリストが、聖書に書いてあるとおり私たちの罪のために死に、葬られ、聖書に書いてあるとおりに三日目に復活された」。ここで繰り返されている「聖書に書いてあるとおり」とは「神は約束のとおりに」という意味です。神は約束をまもられる真実な方。旧約聖書の最初からずっと流れている「神の愛の約束」がキリストにおいて実現したという信仰です。「神の愛の約束」が、あの十字架の場面では粉々に砕かれた弟子たちを新たに創りかえて、教会を生みだしていったし、さらには教会を迫害していたパウロのかたくなな心までをも砕き、キリストに仕える者、福音を伝える器に創り変えていったことが見えてきます。「聖書に書いてあるとおり」とは、ここに次々に起こされた恵みの出来事の主語はすべて「神」だということです。

また、わたしがこのパウロの言葉から強く迫って来るのは、キリストを宣べ伝えずにはいられない、キリストの恵みによって突き動かされているパウロの姿です。この

キリストと出会うことが出来て、ほんとうにうれしい。使徒たちの中でも一番小さな者、使徒と呼ばれる値打ちもない者が、神の恵みによってキリストを宣べ伝える恵みをいただいているのは、何と幸いなことだろうか！…と喜びに生かされているパウロの姿です。まさに復活の信仰に、日々パウロは生かされていたのですね。私たちもまたキリストの復活の恵みを日々伝えていく一人ひとりとされたいと願います。

もう一つ、先ほどは読むことが出来ませんでしたが、パウロは続けて「死者の復活の希望」について語ります。キリストの復活は、私たち一人ひとりが必ず迎える死、私たちにとっては敵のように思える手ごわい死を滅ぼしてくださったのだと語るのです。20 節「キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となられました」、26 節「（キリストにより）最後の敵として、死が滅ぼされます」。死は私たち人間にとってもっとも恐ろしいものです。私たちの力ではいかんともしがたい、一ミリたりとも動かせない手ごわいもの。しかし恐怖としての死はキリストにより滅ぼされ、私たちは最終的には神の愛に迎えいれられる希望を復活は教えてくれています。私たちは、手ごわい死を前にしても、なお神の国の希望を仰ぎ見て歩むことがゆるされているのです。これ以上の幸いはありません。

今朝の週報の巻頭言に紹介させていただきましたが、身体に重い障がいを抱えて、ひどくゆがんでいるフィリップが、主イエスによって抱きかかえられて神の国の喜びの食卓に加えられている。神の愛を喜び歌う一人とされている。これがイースターにおいて私たちが賛美している内実であることを、カトリック神父のナウエンは書いています。それゆえに、そのフィリップの命を支える日々の介助の働きの尊さを語っていきます。彼の身体を洗い、食事を与え、車椅子を押したり、抱きかかえたり、キスしたり、優しくなでたり…。これらの働きは、神の国で障がいを持つ人が新しい命を与えられるときに、神の祝福を受ける大切な働きなのだと。

このナウエンの言葉は、キリストの復活の希望をいただいた者が、日々どのような働きに心を向けていくべきかを指し示しています。この地上を一緒に生きている友と一緒に復活の希望と賛美にあずかるために、私たちは互いに支え合い、担い合う奉仕に招かれているということです。復活の希望に生かされる者は一人では生きられないのです。パウロがキリストを宣べ伝えられずにはいられないように、誰かと関わらずにはいられない。誰かと生きる労苦を分かち合うことは、復活の希望と賛美を分かち合っていくことだからです。

復活の希望が照らし出しているもの。それは「神の国の愛と希望のビジョン」を生きる幸いです。私たち一人ひとりの歩みが、神の国に向かって、誰かと一緒に労苦と賛美を分かち合っていく。それは独りぼっちの歩みではありません。十字架と復活の主と一緒に歩む喜びの歩みなのです。